

大阪再発見

written by Tomoyo Kurimoto 栗本 智代

* 第7回 *

ライフスタイル文化の発信地 「堀江界限」

暮らしを演出する新旧装置のあり様



堀江には公園も多い

はじめに

最近、大阪でおしゃれな若者の関心を集めており、ファッションやグルメ雑誌に必ず取り上げられているのが、堀江界限である。近年、レトロな雰囲気のカフェ・レストランや雑貨・インテリアショップが急増し、新たな感覚の空間づくりが注目されている。

しかしこの界限は、もともと水の都・大阪を代表する堀割のまちの一面で、元禄期に開削された堀江川の誕生を契機に堀江新地が開発され、茶屋や夜店市、勧進相撲などが許可された遊所であった。廓のまち新町とあわせて、大変な賑わいをみせていた。また、江戸時代から材木問屋や古筆筒を扱う古道具屋が多く、それが転じて家具のまちとして発展した歴史を持つ。それらの歩みをベースに、昔の店舗や倉庫をリニューアルしたり賃貸したりして、老舗と新しい店が共存する形で、いろいろなタイプの店が増えてきた。また、住民の感覚から生まれた交流の「場」やネットワークも、新しい賑わいづくりのきっかけとなった。こうして堀江は、大阪を代表するほどの、ライフスタイルに関する文化の発信地となったが、そこには家具屋店主たちや、このまちにこだわる住民による仕掛けや冒險の積み重ねがあった。



「muse大阪」店内

堀江の賑わいの歴史



堀江川の跡
堀江川は、西横堀川と木津川を結ぶ、全長約1340メートルの川。この川を境に北堀江と南堀江のまちの名前ができた。

元禄十一（一六九八）年、河村瑞賢が堀江川を開削し、この川の北側を「北堀江」、南側を「南堀江」と通称するようになった。幕府は、堀江新地繁栄のため、同年末に、茶屋株六十八軒、煮売株三十一軒、水茶屋三十一軒、湯屋株五軒、道者宿株百一軒、髪結床二十六か所、能舞台・芝居各三か所、他相撲・魚市、青物市などを許した。実際にまちが賑わいはじめたのは寛文二年頃からで、当初は、阿弥陀池和光寺への参詣人のために五軒茶屋が建ち、茶立て女を置いていた。また堀江が相撲の定地になると、角刀茶屋の名義で色茶屋ができた。和光寺

東門前通りを北へ曲がるあたりにも四十七軒の茶屋があり「いろは茶屋」と呼ばれた。以来、「元禄以前の古町と、新地の町と入り交り、追々繁華の地（『摂津名所図会大成』より）」となった。北堀江・南堀江は問屋街として発展し、北には北海道産物、薩摩方面の問屋が、南には藍玉、砂糖、荷受、炭屋街などがあった。

その後、北堀江（当時の北堀江上通二丁目）には、明治四（一八七一）年、堀江遊郭ができる。大正七（一九一八）年十二月末には、芸妓置屋十軒、娼妓屋三軒、貸座敷百七十八軒で、芸妓五百六十人、娼妓七十二人が登録され、遊里として賑わった（『大阪府全志』）。後、昭和三十二（一九五七）年四月の売春防止法施行によって解散し、料理屋、旅館、下宿屋などに転業した。

堀江には、土佐藩の蔵屋敷があった。現在の土佐稲荷は、当時の土佐藩蔵屋敷内にあった鎮守の神に由来する。この蔵屋敷に、水運を利用して、材木や和紙、鯉節などが集まった。材木は、もともと立売堀に集まっていたが、のち紀州と土佐の材木が主力になったため、材木

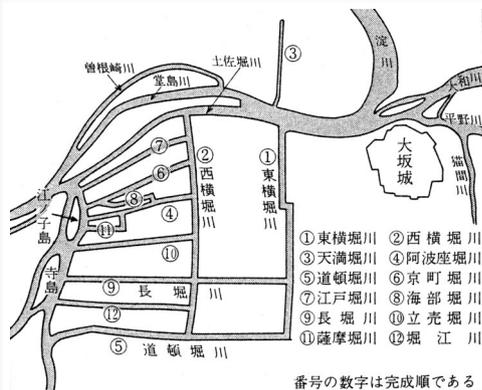


勸進相撲興行の地 跡碑（南堀江公園）
相撲場は元禄15（1702）年に創設、堀江新地繁栄策の一つとして開かれた。場所は春秋2回、13日間の興行で、100メートル四方によしずを張って行われた。後に相撲は、ここと難波新地あたりで一年交代で興行、さらに西天満、幕末には北堀江と移っている。

堀割のまち

かつて、「水の都」と称えられた大阪の中でも、現在の西区あたりは、特に西横堀から分流して西に流れ込む数多くの堀川があった地域で、もっとも水の都らしい景観を誇っていたと考えられる。これらの堀川は、まちづくりの一端でつくられ、堀から出た土で、新たに土地造成を行った。川を掘ると交通の便もよくなり、商業の町として発達していったのである。

まず秀吉時代、大坂城が造成されたのをきっかけに、東横堀の開削が文禄三（一五九四）年に始ま



主要水路の開削順（「新修大阪市史3巻」より）

り、江戸時代に入って、慶長五（一六〇〇）年に阿波座堀と西横堀が開削された。その後、道頓堀・江戸堀・京町堀・長堀・立売堀・海部堀・薩摩堀と続き、元禄に入ってから十二（一六九八）年堀江川が完成した。

「立花通り」は、南堀江の中で
も家具街として有名で、最近では
新しいブティックや雑貨店が若者
を集めている。もともとは、橋通
り」という名前で、堀江新地開発
時に付けられた。元難波神社御旅
所に橋姫をまつた神社があった
ことが由来だという説がある。明
治五（一八七二）年の町名分合改
称により一度失われたが、昭和三
十四（一九五九）年にその音韻を

とって、「南堀江立花通り」として
復活した。
幕末の頃から「道具屋筋」と称
され、明治二十年頃までは古道具
屋が多く、古筆筒をはじめ、長持・
鏡台・仏壇・戸障子等建具類・洋家具・
机・椅子・テーブル・畳・屏風・襖・
硝子・欄間職・指物職など、あらゆる
道具類を製造または販売する商
店が軒を連ねていた。その後、おい
おい家具の重要性が認められて、

大正時代から重要物産となり、や
がて「家具屋通り」として定着す
るようになった。特に一九六〇年
代の高度経済成長期、持ち家の増
加に伴い、家具の売り上げが著し
く伸び、立花通りは家具の街とし
て全国でも有名になった。ところ
が一九七〇年代以降、徐々に人通
りが減少し、八〇年代には、一日
中ほとんど誰も歩かないというゴ
ーストタウンになってしまった。郊
外型の家具店の影響もあったが、マ
ンション住まいや一人暮らしも増え、
家具のファッション性や利便性が重
視されはじめたのに対して、立花
通りの家具店主は、昔ながらの値
引き売り中心の商法にとどまっ
ていたため、客が離れていったのである。
八百メートルほどの長さの通りを
挟んで四十軒近く並ぶ家具屋は頭
を悩ませた。

「このままでは、街全体がダメに

立花通りの変身 〜手作りの運動から〜



和光寺(阿弥陀池)
元禄11(1698)年開創。別名「阿弥
陀池」と呼称され、境内および周辺
には、寄席や芝居の席、見世物や物
売りが集まり非常な賑わいをみせた。
(図は「浪花百景」より)

市場はこの土佐蔵に沿う、西長堀、
北堀江あたりに移った。時代を経
るうちに、北堀江は材木問屋街に、
南堀江は、特に道頓堀川の舟運が
手伝って、川周辺の材木屋の影響
もあり、家具屋が増えていった。



立花通り

応募から「Orange Street」(オ
レンジ通り)に決定した。橋をミカ
ン類と解釈し、当時有名であったト
マト銀行にも意識して分かりやす
い名前にしたという。

その後、大阪市からの助成金を
利用して、インテリアセミナーを
開講するなど試行錯誤しながら、
九二年末にフリーマーケットをテ
スト的に開催した。約二千人が集
まったため恒例イベント化しよう
と試み、九三年五月から「第二日
曜はフリーマーケットの日」として
定着させた。

なってしまう」、「引
いてなんぼの家具
屋街ではあかん」と
商店街(協同組合立
花家具秀会および
立花通商店会)の二
代目たちは、一九九
一年に「立花通活
性化委員会」を設置、
立花通りの愛称を
公募し、千通以上の



老舗家具店内



ORANGE STREET



これらの活動の中心となったのは、(株)大彌リビング代表取締役社長の能口仁宏さんである。家業を継ぐ形で立花通りにあつた倉庫を改装し、インテリアショップ「Scalene」(IDEEショップ)を八六年からオープンさせていた。「イギリスのポートベローやカムデンロックは家具の街として有名ですが、実際に行ってみると日曜にフリーマーケットを出して、家具店がアメリカ村のようになっていたので、大きな衝撃を受けたんです。大阪でも南港のような行きにくい場所でも、フリーマーケットには大勢の人が集まっている。これをウチでもやってみよう」と、オレンジストリート』の愛称をつけた後、日曜に駐車場を借り切つて、各家具屋は店の前の路上でバーゲンセールをして、



能口仁宏さん

一日間だけフリーマーケットを開催してみました。家具屋が自ら、近くのマンションにチラシを入れて行くようなこともありました。また、端つこの店まで来てもらおうと、スタンブラリーをしたり、ライブペインティングや大道芸人、ジャズバンドなどに、手弁当で手伝ってもらったりして、それまでゴーストタウンだったところに、一気に千人近くのお客さんが集まった。それで、四つ橋筋を挟んで隣接する、アメリカ村のフリーマーケットの日とも連動させながら、恒例化を目指しました」。

さらに、九四年から「ベストカッブルコンテスト」と題して、その年に結婚を予定しているペアの写真を公開する。能口さんは、手作りの運動の積み重ねで、家具屋の意識もやつと変わってきた。もちろんいろいろ問題は起こりました。ライブペインティングで絵の具をこぼして、道を汚したりと住民が文句を言った



「オレンジストリートオフィシャルマップ」(上)と「ベストカッブルコンテスト」冊子(下)

コンテストが開催された。立花通りの家具屋で多く取り扱っていた婚嫁家具のお客さんである若いカッブルへ、家具の

街をアピールしたいという試みがあったが、初回から二百二十七組のカッブルが応募するという人気で、第一〇回まで開催された。九六年には、「オレンジ通り家具フェスタ」として、各店舗が新しいメーカーや新作を店頭にメインディスプレイするなど、単なる家具の見本市よりも、一般のお客さまが楽しめる工夫を凝らしたという。大阪市からの助成がある。一商店街一運動』として、イタリアをテーマにイタリア製の家具を中心に紹介したり、今年はいギリスをテーマに、立花通りだけでなく南堀江公園もイベント会場にして開催する。能



大和家具による、家具と雑貨の店「ア・テール」

大喧嘩になったこともありましたが、何とか解決できるものです。やはり、まちの活性化のためという志があるので、継続できるんですね」。

その後、家具店によっては、扱う商品展開や店の雰囲気、今日のニーズにあつたよう一新して再スタートを切つたところもある。例えば、大和家具では婚嫁筆箱を置いていたスペースを、家具と雑貨の店「ア・テール」としてオープンし、後に家具部門だけ「キュービックススタイル」として分離させたのが効を奏して、予想以上の人気を集めた。その後、九八年に、東京発の人気ブティック「A・P・C」がオープンしてから、立花通りに訪れる若者が増え、他の家具屋も加速度的に、主に東京発の大手資本を誘致してブティックやカフェに転身を図るところが相次いだ。そして立花通りは、急激にファッションストリートとしてのイメージを強めた。「誰も通らなかつた閑散としたまちに、今ではこん



98年の「A・P・C」に続き、99年(株)サザビーが「アメリカンラグジー」をオープン。
(写真:右)

インポートの家具やインテリアが若者の人気を集めている。
(写真:左)

なにかくさんの若い人が来てくれるのがまず嬉しい」という能口さんだが、「家具屋よりアパレルなどを扱うお店が多くなって、当初は東京からきた新しい商店のスタッフと地元の人との交流がなかった。それで親睦を深め協力しあおうと『堀江ユニオン』(堀江街づくり活性化連盟)を立ち上げました。タウンマップをつくり、まちの掃除をするところからはじめています」と、

手作り感を大切に、商店をベースにしたまちの活性化を目指している。

住民発、「場」の創造

堀江という街は、「人が住む街」であるため、都心でありながら、独特のなごやかな空気が流れているのが一つの特徴である。その住民発・地元発の大小の試みが、堀江の多様な文化発信力となっている。

「muse 大阪」

一九九八年の秋、堀江公園の前に一軒の店ができた。「muse 大阪」と称するその空間は、建物全体をミュージアムに見立てたもので、一階がカフェ、二階がギャラリー、三階がサロン。それぞれのフロアに、時代を担う若いアーティストの作品が集められている。オープン当時は人通りも少ない静かな場所であったが、この「muse 大阪」の出現をきっかけに、堀江にカフェブームが起こったともいわれている。プロデュースしたのは、日限萬里子さん。一九七〇年に、「L O O P」という小さな喫茶店をつくり、それがアメリカ村誕生の基点になったことは有名。それ以降、アメリカ村や堀江を中心に展開された「場」のプロデュースは、周辺環境にまで影響



「muse 大阪」

を与えるものとして注目を集めてきた。日限さんは、三十年近く堀江で暮らしている中で、何か意図して新しいものを手がけたのではなく、「自分の住むまちに欲しいものを創っただけ」という。街の住人ならではの感覚を素直に表現したところから、地域に密着した独自のあたたかい「場」が生まれたのだらう。

SUMISO

南堀江の南端、西道頓堀川沿いで、倉庫の二階がアトリエスペースとして転用されていた。その名も「SUMISO」。この倉庫を所有する(株)住友倉庫は、自らの所有施設を利用して、アートや美術、演劇などの育成発信に寄与したいという方針で、その関連会社である住倉興産(株)が管理する「道頓堀倉庫」の二階

部分を、実験的に公開アトリエや展示空間として、一九九九年から活用している。

現場へは、看板をたよりに小さな鉄扉をくぐって敷地へ入り、倉庫の外壁に張り付いている階段(三階分はあると思われる)を上がりきると二階部分にたどり着く。この入り口までのアプローチが、劇場的でもあり隠れ家的でもある。内部も、柱や高い天井など、倉庫感たっぷりのにおいと空気が漂っている。この日は大学の写真部の展示会が開催されていた。

運営は、(有)クリーン・プラザーズが担当。もともと事務所ビルや宿舍の清掃と代替に、ビルの空き室を共同アトリエやグループ展のスペースとして確保・提供する「清掃プロジェクト」からスタートしたアーティスト集団である。倉庫の改装や各種設備などの必要経費は、住倉興産とクリーン・プラザーズが共同でまかない、オープン後は、経理と構造物の維持管理は住友興産、企画運営はクリーン・プラザーズが主に担当している。

クリーン・プラザーズの代表、川端嘉人氏は、「住倉興産の方が、私たちの活動に興味を持っておられ、声をかけてくださったのがきっかけです。もとは倉庫ですから、照明

「まちと新しいものが
お互い育つていく関係」

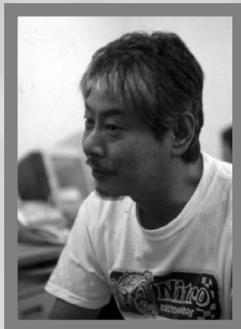
(株)エルワールド代表
空間プロデューサー 日隈萬里子



堀江は、『住むまち』として、とても魅力的です。都心に近いのももちろん、公園も多く、道路幅も広くゆとりがあるし、学校もある。夜、お酒を飲み過ぎてても、這ってでも帰れますしね(笑)。

や音響などの設備が限られていますが、三百平方メートルほどの広い展示スペースと作業場・工房があるので、特に当初は、展示より制作の場として活用して欲しいと考えていました。アトリエを持つ人も少ないし、普段できない大きなものを創つてもらえますから。展示会などの内容について、積極的なコマーシャルはせず、ほとんどDMで、これまで展示してくれた人に見にきてもらうという、出展者

四年ほど前、病気で体を壊してこのまちでゆっくりと過ごしていた時に、「自分のまちに、自分好みのくつろげるカフェが欲しい」と感じました。ちょうど堀江公園の横に二十坪の空き地があつて、公園も含めて季節感のあるものを創りたいなあ」とふと思つたんです。また、『パブルが崩壊しても、こつこつと一生懸命頑張つても創りをしている若い人たちがクロースアップされる舞台にもなれば』と考えました。『MUSE(ミューズ)』というのは、芸術をつかさどる女神を意味しています。カフェの机や椅子も、若いアーティストの作品を使用し、店でありながら、全て無名のアーティストたちの作品



川端嘉人さん

と来客との質の高い関係づくりを目指しています。また一年に一回、約四十日間、レジデンスとしてアトリエ使用し、最後の一週間、発表していただくという実験も繰り返

というミュージアム、そして交流の場にしたいと考えました。オープンングも堀江公園で行い、作品を展示したり、映像を映したこともあります。一部の住民の反対もありましたが、折り合いをつけながらやっています。
デザインに関しての注文は、丸くてあたたかいもの、「シンプルに」とだけ。店が自己主張したらダメなんです、お客さまが死にますから。空間デザインを担当してくれた間宮君(間宮吉彦氏)は、まだ学生の頃、私がアメリカ村につくった「PALMS」に遊びに通つてきてくれたお客さんで、ライブハウスの「OOO」から一緒に仕事をしようになりました。最初は無

名のクリエーターが、自分のところから成長して、一人前になつていくのをお手伝いしたり見守つたりと、まさに子育てをしているわけです。まちと新しいものが、お互いに育てあつていってほしいと思います。切花的に、映画のセットのように新しいものをつくつて、そこで皆演じて、古くなつたらつぶす、というのではなく、私はまちに根っこを生やして、スタッフを育てていきたいですね。
もともと人を楽しませることが大好きなんです。自分自身もお店も、その時代の『旬』であることを大切に、挑戦し続けたいです。そのチャレンジ精神が、まちにも反映していくんでしょね。

返しています」。運営担当マネージャーの小野千晶さんは「ジャンルにとられずに場を提供したい。現在では、平均一か月で四グループ(または四人)のペースで使用していただいています。ここでつくった作品が評価されて、新進気鋭の作家として受賞される人も出てきました。今、アーティストにとって、発表の

場は多すぎて混沌としていますが、『SUMISO』では、場の付加価値を企画するという意味で、ア



アトリエ内。左が小野さん(奥は、キリンアートアワード2002で入賞された佐々木愛さん)

ティストの一契機として試す場所、登竜門になればいいなと思っっています。

堀江ジャンクション

堀江にあるさまざまなギャラリーを中心に、この地域に関わる人や場をつなぐ試みが「堀江ジャンクション」と称して芽生えている。堀江に点在するギャラリーの情報を提供を主な目的に、連携させることでの発信力の強化と、個々のギャラリーの独自性を効果的に伝えるよう心がけている。

このサイトを立ち上げた永原達哉さんは、ヨーロッパの美術館関連の仕事をしていて、十年前から堀江に住んでいたが、二年前前に、

回遊性により賑わう堀江

十年ほど前の堀江は、ブティックもカフェもなく、住人がのんびりと暮らせる静かなまちであった。萬福寺で子供に英会話を教えていたという永原さんは、三年前にふとその変化に気がついたという。「しやがんで子供と接していると、火のついたタバコが目のかすったんです。くわえタバコで行き来する人が増えただけでも、子供にと

まちが急激に変化したのと同時に、個性的なギャラリーが増えているのに気付いた。若い経営者も多く、その情報発信のお手伝いができればと考えたのがきっかけだったという。まず二〇〇一年夏に、堀江公園の南側にある萬福寺の前に「アートビルボード」と称した掲示板を設置し、各ギャラリー紹介をし、十二月にはホームページ、二〇〇二年春からは隔月発行のフリーペーパー「マップ」へと発信活動を広げている。この夏に企画したイベントは、昔に堀江で活躍した博学者の木村兼葎堂から名前をとって「兼葎堂アートフェスト」と題している。作家とギャラリーと来場者が交流するお祭りを目指して、「SUMIISO」で共同展示会を開催した。

つて危ない。近所のスーパーにも、昔は気楽にラフな格好で行っていたのに、最近では若いおしゃれな人たちがいるので気を遣う。路上駐車やゴミ、落書きも増えて深夜でもうるさい」と、生活者として、正直、暮らしくくなつた」と言う。暮らしている人と来街者・遊びを仕掛ける人が、互いの立場をとともに理解しあい、特に後者は、基本的

「ギャラリーをつなぐ」

堀江ジャンクション代表

永原 達哉



堀江を紹介するサイトはたくさんありますが、ここ数年、ギャラリーが増える中で、美術やアートに特化したサイトがなかった。それで立ち上げたのが「堀江ジャンクション」です。準備期間中は、アートビルボードとして、いわゆる掲示板のようにギャラリー情報を貼り付けていたのですが、堀江に訪れる若者の間で好意的に利用していただき、その情報発信を担う場としてホームページをつくった訳です。その中で、ギャラリー同士は、お互いライバルかもしれないかもしれませんが、その内容を見てみると、大切に思っている部分が一緒だと理解し、ギャラリー合同の展覧会ができるいかと企画したのが「兼葎堂アートフェスト」です。木村兼葎堂といえは、当時は有名な博

学者でアーティスト。私財をなげうつて若いアーティストの「コラボレーション」の場も提供していたので、兼葎堂の理念を今に表したいという思いを込めて催しの名前にしました。三日間で千人ほどの来場があり、SNSにも取り上げられたことで、外部からの問い合わせや依頼が増えました。ただ、これからは、堀江のギャラリーからアーティストが成長して欲しいと思います。

木村 兼葎堂 (きむら けんかどう)

江戸期、元文元(1736)年、今の北堀江4丁目あたりに生まれた、本草学をはじめ博学多芸の町人学者。11歳で片山北海に漢学を学び、成人するに及んで博学多才、詩にすぐれ書に長じ、池大雅に画を習って大雅そっくりの絵を描き、物産本草学(今日の博物学)に精通、オランダ語やラテン語にも通じた。邸宅は、図書館であり博物館であり、知識人の一大サロンであったという。その邸宅跡碑が、昭和35(1960)年大阪市によって市立中央図書館南東角に建立されている。



「木村兼葎堂アートフェスト」のシンボルマーク。歴史上の人物を、今の若い人たちに近づけやすいイラストにおした(当人像イラスト)



北堀江にオープンした「COR」

な礼儀作法をわきまえる必要があるだろう。

この数年の南堀江は、日本でも稀にみるほどの激しい変貌を遂げた。高い家賃とハコ貸し（ブースごと、フロアごとではなく建物単位の賃貸）という条件を受けた大手資本が入って、人気ブランドで若者を集めてはいるが、この熱が冷め、撤退した後どうなるのか。家具屋をはじめとする店主も、長い目で場の提供を考える時にきている。「大家さんは、金銭的なことだけでなく、その内容を考えて、堀江ならではのアクセントのある店づくりを試みる必要がある」という日限萬里子さんのつぶやきが思い出される。

その日限さんが最近手がけたのが、北堀江の「COR（コル）」という複合施設である。この九月にオープンしたばかりだ。もとは古い材木屋の跡地でモータープールであった二



まちの歴史的な歩みを今にとどめる「ランマ」屋

百三十坪の土地を、オーナーさんが「この地域に還元できるいいものを創れないか」と日限さんに託したという。「COR」は「核」という意味で、北堀江の新たな賑わいをつくる核になることを目指している。「若い人に占領されている南堀江に対して、少し年配の人も意識しながら、グレードの高いものを置いています。紳士のトータルコーディネートを提供する店も出てきました。韓国やニューヨークで成功しているブランドも、北堀江に出店することで新たな挑戦をしているんですね」と日限さん。この精神が北堀江に新たな波及効果を生み出すことだろう。

西道頓堀川を隔てた湊町には、七月に「湊町リバープレイス」がオープンした。大阪市が道頓堀川水辺整備事業と連携して計画したもので、音楽ホール、なんばHatchと水辺空間を見下ろす大階段の広場など、ミナミの新しいシンボルとして、若者を集めている。南堀江はそこから歩いて数分のアプローチであるため、新たな人の流れができた。堀江は、新地から家具街へと発展、そして、今ではビビッドなモノや情報の発信地として、日々訪れる人が絶えない。その昔、堀江新地の時代は、廓のまちである「新町」と行き来する客によって盛り場となり、今日では、隣接するアメリカ村や南船場、湊町などつながりながら、独自のまちづくりや「場」づくりが行われている。栄枯盛衰を繰り返しつつ、時代によって性格は異なるものの、隣接するまちとの回遊性により栄えるという土地性が、昔から現在まで受け継がれている。また家具屋街がベースとしてあるため、店構えは変わっても、ライフスタイルに関する文化を発信し続けているのも大きな特徴である。

ここには、都心にありながら緑が多く、のんびり散歩もできる、人が住むまちならではの空気感が、今は何とか残っている。都市居住が楽しめる貴重な場として、もっと見直されるべき地域であろう。そして、消費をある場としてではなく、暮らしの楽しみを演出する新旧の装置がある、堀江自身の雰囲気最大の魅力として、来街者もその雰囲気

を壊さないように気を遣いたくなるような、上質の「まち格」を抱く、まちづくりが望まれる。

（大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究員）

主な参考文献

- 『西区史(全三巻)』西区史刊行委員会 昭和五四・五三・初版発行 清文堂出版株式会社
- 『大阪の町名』大阪町名研究会編 昭和五一・一九・一発行 清文堂出版株式会社
- 『船場』宮本又次 昭和三五・一二発行 ミネルヴァ書房
- 『大阪繁盛記』宮本又次 昭和四八・五発行 新和出版
- 『難波大阪 郷土と史蹟』牧村史陽編著 昭和五〇・一一・一五発行 講談社
- 『西区の史跡を訪ねて』 西区役所 平成九・三発行 清文堂出版株式会社
- 『大阪史蹟辞典』昭和六一・七 清文堂出版株式会社
- 『Meets Regional』 No.一四五、一五三、一六五、一六六他 増刊号、別冊号等 京阪神工業マガジン社

ほか